

花に添^そうもの背^{そむ}くもの

初盆を迎えた東京の姉の家に花屋さんから電話。葬儀社から供花の配達を依頼されているが、どんなお花をいつごろお届けすればよいかとの問い合わせである。葬儀社はもちろん花屋も遺族の悲しみにそうっていてゆかしい。本当の企業努力とか商売熱心とはもうけ一筋だけではなく、お客の心にくれるものを宿しているものである。

毎新年に東京の知人から洋蘭を贈られて久しい。某年、贈り主が来訪され応接間のその花を見て驚いた。「まさか贈り主が現れるとはいかな花屋も考えなかつたでしょうね。花芽が三つも少ない。チェーン店の別府の花屋はずるい」。花芽一つが数千円で計算されて、注文の品とは数段の貧弱さ。それからは空の便で届けられている。花屋の花泥棒はあさましい。

生きるためにひとは懸命にかせぎ蓄える。アリスさんのように。それが職業。しかし、人間は同時に職業を通して自分を表現する存在でもある。表現とは自分以外のひとを予想し、価値ある働きをしようとする行為である。それが人間の本質、人間性である。

アフリカで白人の原罪を償うため黒人医療に献身したシユヴァイツァーは言っている。「ほとんどの人が自分の生計のために職業についている。でもどんな職につきようとも人間性のある生活をする道はちゃんとある。それはとくに助けを求めている人に対して、職業生活のかたわら、人間性のある援助を常に心がけることだ。その機会は身辺いたる所にある。真の人間性を以って人間に働きかける。それにのみ人類の未来はかかっている」。

また言う。「人生において多くの美しいものを手に入れた者は、そのかわり多くのものを提供すべきだ。苦悩を免れた者は他人の苦悩を軽くすべきである。さあ、この世に存在する不幸の重荷を皆で一緒に担おうではないか」

自分以外のものに自分をつなぐもの、やがて自分以上のものに自分を捧げるに至るであろう。

(一九九〇年八月二十四日)